
ドクターズファミリー ケース3

GFJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドクターズファミリー ケース3

【Zコード】

N7072C

【作者名】

GFJ

【あらすじ】

医師を両親に持つ栗原翔太は、中学一年生。医師になつてほしいと願う両親の思いが、翔太には重荷になつていく。

＜栗原翔太君の場合＞

ボクのお父さんは、泌尿器科の医者をしている。お母さんも小児科の医者をしていた。ボクを産むまでは。

小学3年の頃、ボクは作文で、将来医者になつて世の中の困つている人を助けたい、と書いた。その頃は、本当にそう思つていた。いや、少し違う。そう思つてゐると思つていた。

最近、それはウソだと思つようになつてきた。将来医者になるのかと思つと、ボクは憂鬱になる。医者つて、ボクの中では、「樂しくない」職業だ。お父さんがボクに「医者つて言つのはな、……」と言い出すと、ボクは逃げ出したくなる。作文だつて、お父さんが期待しているつて思つたから書いたんだ。ボクはずつといい子だつた。

お母さんは、ボクに医者になれとは言わない。

「翔太の好きにすればいい」と言つ。

でも、ボクは知つている。お母さんもまた、ボクに医者になつてほしいんだ。

去年の正月、ばあちゃんちへ行つた時、知子おばちゃんは、ボクに言つた。

「翔太、大きくなつたらお父さんとお母さんみたいなお医者さんになるんでしょう？」

いつからかな。じつじつ言葉が何となくイヤになつてきたのは。

今年の正月は、塾の中學受験合宿があつたから、ばあちゃんちに行かなかつた。受験勉強は好きじやなかつたけど、ばあちゃんちに行くよりいいかなつて思つたさ。親戚が集まると、必ずボクの話が一回は出るんだ。何かね、居心地悪いんだ。

そうそう、去年の正月の話だつたね。知子おばちゃんが、ボクに将来の話をした時、お母さんは、言つたんだよ。

「医者になりたくても、偏差値がね。ね、翔太」

「うううのや、「翔太の好きにすればいい」って言つた葉と矛盾してゐるでしょ？ お母さんのこいつの所、ボクいやなんだよ。だつたら、お父さんのように「医者になれ」つてはつきり言われる方が、まだマジだよ。

ボクが医者という職業が何となく嫌いになつたのは、小学5年の時に同級生からからかわれたことが原因の一つになつてゐると思う。「泌尿器科つてさ、チンチンいじるんだろ？ オマエの父ちゃんつて、スケベだあ」タクヤもトモヒロも股を広げて体を左右に動かしながら、ゲラゲラ笑つた。

せめて、お父さんが「外科」とがだつたら、もう少し格好よかつたのに。

お父さんは、手術が「ま」と……らしい。時々透析シャントの話を聞く。腎臓が悪くなるとおしつこが作れなくなるから、透析をして、老廃物を出すんだつて。ボクは、シャント術という手術をするのは格好いいと思う。だから、タクヤとトモヒロに

「泌尿器科はシャント術をするんだよ。」と言つたら、二人はキヨトンとした。

トモヒロが

「シャント術つて何だあ。」と聞くと、タクヤはまたゲラゲラ笑い出して、

「ばつかだなあ、お前。シャント術は、チンチンが『しゃんと』するように手術をするんだよ。」とバカなことを言つた。

ボクの透析の話は全然聞こえてしないで、

「何だあ、それ？」

「翔太の父ちゃん、やつぱりすべきだあ

とうとう、一人で手を叩いて踊りだした。

もつとこやな事があった。

ツヨシが言つたんだ。

「医者つてさ、本当は金儲けのことにばかり考えてるんだよ。父ちゃんがそつ言つてた。医者は信用ならんって。」

ボクのお父さんが毎日どんな生活をしているか、何にも知らないくせに、いい加減な」と言つた。ボクは、お父さんの懶口を言われてこりみたいで、悲しかつた。

お父さんは、いつも仕事が忙しい。小学校の6年間で、一度も運動会に来てくれたことがない。授業参観だつてそうだ。

お母さんから、「お父さんは患者さんの命を救う仕事をしているんだからね。運動会はお母さんが行くから」と言っていたから、「運動会に来てほしい」なんて言つたことがなかつたけど、トモヒロの所なんか、毎年必ず、お父さんが派手なシャツ着てきてビデオを撮つてゐるんだ。やつぱり、いいなつて思つたわ。つむぎ、お母さん一人か、お母さんとばあちゃんの一人だつた。

日曜日だつて、お父さんに遊んでもらつたことつて、ほんんどないんだ。遊園地に行つたことが一回、あとば、飛行機のプラモモデルを一緒に作つたことが一回。家にいるときは、お父さんは、大体ぐうぐう寝てゐる。

夏休みの感想文は、いつも、じいちゃんと遊んだこととか、お母さんと花火を見に行つたことばかりで、お父さんのことが書けない。友達は、お父さんと魚釣りに行つた、とか、キャンプをした、とか書いてくる。ああ、そういうえば、アリスちゃんといは、お父さんがないから、淋しいのはボクだけじゃないんだけど。

6年生の頃、一度だけお父さんに聞いたことがある。

「お父さん、医者つてさ、やつて楽しい?」

お父さんは答えた。

「やうだな、医者だけじゃなくてどんな仕事でもそうだろ?が、い

つでも樂しいってわけじゃないさ。だけどな、99回苦しい思いや悲しい思いをしたら、次には、とっても嬉しいことが待っている。だからな、その99回を逃げずに乗り越えることが大切なんだ。医者の楽しみはその繰り返しでやってくる

「何だか、わかつたようなわからないような答えた。

「とっても嬉しいことって?」

ボクの素朴な疑問だった。

「病氣で苦しんでる患者さんが、元気になつて退院していくことが。患者さんが嬉しそうに『ありがとうございます』って言つてくれるんだよ」

何か、期待はずれの答えた。

「それが、とっても嬉しいことなの?」

「そりやあ、嬉しいわ。その言葉のために仕事してるようなもんだ。男はな、仕事に命をかけなくちゃならん。やうすると、『」褒美が待つてる」

「うーん。やっぱりよくわからん。

お父さんがいつも忙しいのを知つてたから、ボクは、医者つて大変だよなあつて思つていた。だけど、「ありがとうございます」って言つてもらうために99回も苦しいのを乗り越えなくちゃいけないなんて、冗談抜きで憂鬱だよ。ボクにはできない。お父さんのこと、心の中で自慢に思つてるけど、でも、自分がそういう生き方ができるかつて聞かれたら、それは……考えるだけで気が重くなるんだ。

お父さんのお腹には、手術の痕がある。一緒にお風呂に入った時に聞いてみた。そしたら、胃潰瘍で胃を半分取つたつて言つてた。仕事中にたくさん血を吐いたんだつて。ストレスが溜まると胃から血が出ることがあるらしい。お父さんに言わせると、「男の勲章」つてことになつている。

「お前も医者になつて、困つた人たちを助ける」と言われても、小

学3年生の頃のように素直に返事ができなくなってきた。だつて、ボク、手術なんか受けたくない。99回も苦しい思いをして、胃まで取つて、そのご褒美が「ありがとうございます」とつて、なんか、すごく地味じゃない？ イチローとかだと、”何とか賞”とかもらつて、インタビューに答えて、みんなから沢山の拍手を貰つてゐよ。

中学受験に向けて、4年生から頑張つてきた。友達が遊んでるときに、ボクは塾に行くか、夜はお母さんがつきつきりで問題集を解いた。塾の先生から、「かなり頑張らないと難しいです」と言われて、どういふわけかお母さんが真剣になつた。

お母さんと一緒に勉強するのは、マジでストレスだつた。

図形の問題に手こずつていると、

「何で、こんな簡単な問題がわからないの。補助線一本かけば終わるじゃない」

と、大きな声でボクを叱る。

そんなことを言われたつて、わからないものはわからないんだ。

ボクの横で、段々ライライしてくるのがわかるんだ。

うへへって思つちやう。お母さんと喧嘩するほどボクは子供じゃないつもりだし。

でも、とにかく頑張らないと中学は公立校になる。もし合格しなかつたら、今度は3年後に高校受験だ。それはいやだ。今まで受験のために塾通いしたんだから。

そんなわけで、時々切れそうになるのをぐつと我慢して、中学受験にこぎつけた。そして、何とか志望校に合格した。多分、ぎりぎりだつたと思う。

ボクは今、中高一貫校に通つてゐる。高校受験がないからそれはちょっと嬉しいんだけど、

「高校に上ると、受験で新たに入つてくる優秀な人が増えるから、

エレベーター方式で上る奴は相当頑張らないとダメだ」と、お父さんに言われている。

中学受験が終わって、ちゃんと合格できたんだから、本当にうれしくて、ちょっととゆっくりしてもいいような気がしてたんだけどな。でも、「医者になるためには、今が大事だぞ」ってお父さんに言われる。「今が大事」「今が大事」これじゃあ、ずっと大事つてことじやないか。

もしも、もしもだよ、医者以外に選択肢があるとしたら、ボクは、天文学者になりたいなあ。

山の上に、自分の天文台を作るんだ。口径1m級のぞ、デカイ反射望遠鏡を取り付けて、コンピュータで制御するんだ。

お母さんにそんな話をしたとき、

「バカじやないの。そんなんじや、食べていけないでしょ。」「

つて、ボクの夢、ぶち壊し。

お母さんの発言のどこがボクの気持を尊重してるんだろう。

結局、医者しかないんだよ。お母さんの頭の中には。

少しボクの好きな話をしていい?

ボクね、たそり座のアンタレスが大好きなんだ。綺麗だろ? あの赤色。

綺麗なだけじやない。600光年だよ、そんな遠くの星が、地球からこんなに綺麗に見えるんだ。すげーと思わない? 一重星つてところも、いいよね。

「昨年の3月に、アンタレス食があつたの、知ってる?

見たかったんだけどな、できなかつた。とっても悔しかつた。お父さんは仕事で忙しかつたから、全然アンタレス食の話ができなくて、お母さんに話しても、ちつとも理解してもらえなかつた。一等星の食がどんなにすごいことなのか。しかも、アンタレスだからね。本当に、見るべきだつたんだ。

次に見れるとしたら、おうし座のアルデバラン食がある。2016年だから、まだまだ先。ボクが22歳の時だ。22歳。何してるんだろう。ヒゲ生えてるかな。親孝行して医学部生かなあ。ため息がでちゃうね。

ボクが天体に興味を持ち始めたのは、じいちゃんが星が好きだつたから。ボクがまだ小学2年生の頃、じいちゃんは望遠鏡で月の表面を見せてくれた。ものすごく感動した。そして、その年の誕生日のプレゼントに子供用の望遠鏡を買ってくれたんだ。じいちゃんの望遠鏡みたいに立派じゃなかつたけど、それなりに見えるんだよ。「この望遠鏡を丁寧に扱えるようになつたら、もう少し上等のを買つてやるからな」

じいちゃんはそう言った。

でも、次の望遠鏡を買つてもうつ前に、じいちゃんは死んだ。風呂場で倒れていのをばあちゃんが見つけたんだ。

じいちゃんが、そそり座を教えてくれた。じいちゃんは11月2日生まれでそそり座なんだ。小学3年の夏休み、じいちゃんは、天の川にかかるさそりの尻尾付近のM6、M7、そして、心臓のアンタレスを教えてくれた。

「じいちゃんが死んだら、あの、アンタレスになつて、翔太のことを見守つてやるから。」

じいちゃんは自分が死ぬことを予感していたのだろうか。じいちゃんがアンタレスになつたのは、その年の冬だった。

お母さんがずっと一緒にいるの、正直言つて、鬱陶しいんだ。ボク、悪い子だろ?でもさ、

「翔太のためよ」

つて、それ、ボクが憂鬱になるようにわざと言つてゐるの?

「翔太のために、お母さんは、仕事を諦めているのよ」

そんなの知るかよ。ボクのことはいいから、だつたら仕事していく

れよ。

できることなら、大声で叫びたいさ。

わかるだろ？ボクが憂鬱になるの。

夜、おにぎり作ってくれるのも、苦痛なんだ。

「勉強で疲れたら、食べなさい」

つて、何だよ、それ。

お願いだから、ボクのこと、放つておいてくれよ。

ただ、そう思いつつ、腹減つたら、つい、おにぎり食つてしまつ
自分も情けないんだけどさ。

だから、余計お母さんは、ボクが喜んでるつて思つちゃうよなあ。
でもね、お母さんのいい所。お料理が上手いんだ。ものすごく速
いよ、夕飯の準備なんか。

話しかけると怒られたりする。

「今、忙しいから後にしてちゅうだい」

腕、2本しかないはずなこの、パツと冷蔵庫開けて、パツと材料
取つて、「あらり」とか言いながらガスの火を細めて、さつさつと
刻んだ野菜なんか入れて。誰かと競争してゐみたいな勢いで作るん
だ。見てて面白いよ。味？うん、おいしいと思う。お父さんも、

「お母さんの料理、うまいなあ」と言つ。

同級生にはたくさん、医学部出揃してゐる奴がいる。そう、ボクが
入学したのは、医学部進学率が高いことで有名な進学校なんだ。い
ろんなのがいるよ。ボクみたいに親が医者つて子もいるし、全然家
族に医者がいないつて子もいる。小学校の頃から頭が良くなつて、
だつたら、医者か弁護士つて。

正直言つて、お父さんが医者じやない友達つて羨ましいと思つ。
「きのうのテレビ見た？神の手だつて、すつげえよな。こんなや
つて、こんな風に……。オレ、外科外科。絶対外科に行く
あんなことボクには言えないさ。

神の手は、99回苦しい思いをして、子供の運動会にも絶対に行

かないんだ。
絶対に。

服脱いだら、多分、お腹に縫い目があるよ。

ボクはさ、結局「覚悟」ができないんだと思つ。お父さんのこと、尊敬してるさ。一生懸命仕事をしているお父さんは、格好いいって思うよ。だけどさ、世の中にはいっぱい楽しむことがあるのよ、そういうの、たくさん捨てなくちゃいけないんだよ。今だって、いっぱい我慢してるんだ。ゲームだつてそうだし。

お父さんかむらさんだよ

中学受験なんて始まりの始まりの始まりたって

それなのに、始まりの始まりの始まつて言われたらあ……

お父さんが珍しく早く病院から帰ってきたとき、夕食の席で、また始まつた。『一ヶ月飲んじやつたからね。一ヶ月のやつだよ。

「翔太。医者つてのはな、……」

もう、覚えちやつたよ、そのセリフ

「医者ってのは、国家試験に合格した後から、少しずつ『医者』になつていくもんなんだ。医師免許ってのは、医者になつてもいいですよ、そういう権利を与えますよってだけでね。まだ、医者じゃない。そこから一生懸命頑張つて、少しずつ医者らしくなつていくんだよ。勘違いしてるとかが多いためだな。基礎からじっくり積み上げていく。とにかく頑張つて、頑張つて、がんばつて、な。わかるだろ？」

「うん」

そうとしか答えられないだろ。」ここで余計なことを言つと、また、

話が長くなるんだ。

運動会の応援団で面白い振り付けをすることになった。夜、一人で練習していたら、急に居間の方から大きな声が聞こえてきた。

「私は家政婦じゃない！」

お父さんとお母さんが喧嘩してゐる……

お父さんのもつと大きな声が聞こえた。

興奮してゐるみたいで、何て言つてゐのか、よく聞こえなかつた。

氣になつて、部屋のドアをそつと開けてみた。

お母さんが泣きながら文句言つてゐる。

「翔太ももう中学に入ったことだし、今復帰しなくちゃ、このまま
だと私、どんどん置いてきぼり。どうしてわかつてくれないの？」

「中途半端に医者したつて、現場は迷惑なだけだ！」

「そんな、約束が違うじやない。子供が少し大きくなつたら仕事に
復帰すればいいって。」

「あんな、冷静に考えてみるよ。お前にビリにまでできぬつて言つん
だ！」

ボクはドアを閉めた。

お母さん、病院で働きたいんだ……

しばらく怒鳴りあいが続いて、急に静かになつた。

もう一度、ボクはそつとドアを開けてみた。

居間にはお母さんが一人、テーブルに顔をつけて泣いていた。

ボクには何もできることがなかつた。

ドアのこちら側で気づかないふりをするしかなかつた。

夢を見た。

変な夢。

お父さんがお母さんを殴つて、お母さんが掃除機を振り回してい
る夢。

犬のブッチャーが、クーンクーン泣きながらお母さんの足元に近づ
いて、

そうしたら、お母さんがブッチャーを足で蹴り上げて、ブッチャーは
床に落ちて動かなくなつた。

ボクは、思わず

「やめてー」と叫んで、目が覚めた。

ブッチャーはボクが4歳の頃、つむにやつてきた。
ボストンテリアつていう種類の犬なんだけど、2年前、病氣で死
んだ。

お腹に大きなできものができていた。

ブッチャーが死んでから、ボクは淋しくて淋しくて、また、別の犬
がほしいうて言つたんだけど、お母さんが、

「もう、ペットはたくさんよ。いつかは死ぬでしょ。また、悲しい
思いをしなくちゃならないのよ」

と言つて、買ってくれなかつた。

ブッチャーはお母さんのことが一番好きだつた。

お母さんだつてそひす。ブッチャーが死んだとき、いつまでも泣い
ていた。

今でも、ベッドの横にブッチャーの写真が飾つてある。

それにしても、どうしてこんな夢を見たのだひつ。とつてもリア
ルで怖かつた。

あれから、お父さんとお母さんは、時々喧嘩をするようになつた。
お母さんはいつもイライラしていた。

ボクが学校に行つてゐる間、勉強してゐるんだろうか、分厚い本と英
語で書かれた難しい雑誌が、テレビの横に何冊か積み重なつていた。
お父さんは、やつぱりいつも忙しくて、あんまり話をする時間が
なかつた。

お母さんは、中学に合格した時には、すくく優しくなつたけど、
また、厳しくなつてきた。

時々、急に怒り出すことがあつて、ボクはどうしたらいいのかわ
からぬことがある。

昔は、どうして自分が怒られているのか、よくわかつてゐた。
それが、最近は一体何が気に食わないのかわからぬ。

一学期の期末テスト。

結果は、クラスで28番。ビリから3番目。入学したばかりの時、僕は、クラスで19番だった。お母さんは、気が狂ったように怒った。あんなに怖いお母さんを見たのは初めてだった。

家に帰るのが、だんだん憂鬱になってきた。これまでぼんやりと感じていた憂鬱、それは、まだ、ボクの緊急の問題ではなかつた。

それが、突然、ボクの前に黒い大きな壁になつて迫つてきた。お母さんと二人きりの夜。

「翔太、自分のやりたいことを精一杯できるのは幸せなことよ。勉強できない子が世界には沢山いるんだから。その子たちのためにも死ぬ氣でがんばらなくちゃ。」

ボクらの「犠牲」になつてるお母さんと、自分だけのために一日中時間を使うことのできる恵まれたボク。そして、お父さんとお母さんの望みどおりにやつてけないボクの弱さ。

あんなに大好きなお母さんだったのに、今は……

今は、お母さんがボクに覆いかぶさつているみたいで、息をするのも苦しくて……

そして、お父さんとお母さんが喧嘩をするとき、ボクは、自分がその原因を作つていることを感じる。お父さんの怒鳴り声は「翔太の頑張りが足りないからだ」って聞こえてくる。

お父さんとお母さんは、折角3人で食事ができる時も、話をしなくなつた。お母さんが病院で働くつていう話も出でこない。

食卓で、お父さんが言つセリフは、

「おい、翔太。学校はどうだ」

決まって、これだ。多分、ほかに喋ることが無いのだろう。

何となく気まずい雰囲気になると、ボクに話を振つて場を誤魔化

そうとする。

「うちはいい迷惑だ。

以前は、3人で食卓を囲むのが樂しみだった。いつも、お父さんが遅いから、たまに早いと、お母さんも張り切つてご馳走を作ってくれた。

「翔太、医者つてのはな……」

という話も、うんざりはしたけど、お父さんはいつも樂しそうで、ボクはそんなお父さんを見るのが好きだった。

学校は、そんなに楽しくもなかつたけど、家よりはずっとマシだつた。

学校にいるときだけは、ちょっとだけ解放された気分。

一時間かかる電車通学も、慣れたらどうってことなくなつた。かえつて、朝早く家を出れるから、良かつたつて思つ。

カズヤと話が合つ。あいつも、宇宙が大好きなんだけど、彼のはまり方は半端じやない。

お父さんが、やつぱり宇宙マークからしきつて、天体望遠鏡も4つあるんだつて。ひやあ、羨ましい。そして、なんと、ひとつうーんで、天体望遠鏡を自分たちで作つてしまつたらしいー。

学校では、休み時間になると、彼が持つてきた「宇宙探訪」という月刊誌や天体望遠鏡のパンフレット、それに、カズヤがお父さんと撮つた星の写真を見せてもらつたりした。ボクはいつも、「すげー」を連発した。

今度、流星群を一緒に見に行かないかと誘われた。お母さんが許してくれるかなあ。

それがちょっとだけ心配だつたけど、いくら何でも、もう中学生なんだから、ダメつてことないだろつ。その日は、家に帰るのがちよつとだけ楽しみだつた。

その日、学校から家に帰ると、いつもと様子が違つていた。

ピンポーンと押しても、返事がない。

仕方なく、ボクは自分の鍵を使って玄関のドアを開けた。お母さんは買い物かな。

お母さんは完璧主義者で、いつも家の中が綺麗に片付いていないと気がすまない。

風邪をひいて熱があつても、家の中を動き回って掃除をする。「頭が痛い」って文句を言いながら、お父さんがテーブルに置きっぱなしにしていたテレビのリモコンを所定の位置に仕舞つたり、新聞を片付けたりする。

ボクも本とか散らかしたままにしていると、ひどく叱られた。そんなお母さんなのに、テーブルには、食べた後のお茶碗がそのまま残っていた。

そして、病院の薬袋があつた。" 優々(ゆうゆう) ハートクリー

ック 院長 竹島茂雄"

お母さんは病院に行つたんだ。

ハートクリーツクって何だろ?。

すると、寝室のドアが開いて、おかあさんが出てきた。髪が乱れていた。

ボクはびっくりした。てっきり買い物だと思つていたから。

それに、ハートクリーツクって、何だか見ちゃいけないものを見たような気がしていた。

「帰つてたの?」

お母さんは小さな声で聞いた。

「うん。ただいま。」

「少し待つてね。今から夕飯準備するから。」

お母さんは、少しふらふらしながらエプロンをはめて台所に立つた。

お母さんはいつもと違つて、ゆっくり料理を作つた。

夕飯と一緒に食べながら、お母さんは、一度だけボクの方を見て、優しい目でゆっくり笑った。でも、あとは、黙つて食事をした。スープが何だか塩辛かった。

何もかもが、いつもと少し違つていた。

そしてボクは、とうとう流星群の話ができなかつた。

家の中が、少しずつ変化していった。

お母さんから叱られることがなくなつた。

部屋の中が、少し汚くなつた。

お父さんとお母さんは、全然話をしなくなつた。

お母さんが一人で泣いているところを何度も見た。

その度に、ボクの中には言いしれない恐怖が走つた。

ボクが弱いから。

ボクが自分の将来をまっすぐに見ることができないから。

ボクが家族を壊しているんだ。

それと同時に、お母さんに対して、腹を立てているボクがいる。

どうして、ボクを責めるの？

お願いだから、お母さんは、自分のために生きて。

翔太のために我慢してるので態度を取らないで。

ボクは苦しいんだ。

そして、お父さんに対して、暴力的な気持が芽生えてきている。

絶対的な自信。絶対的な正義。

全て、お父さんが悪いんじゃないかな。

ボクの本当の気持ちに気づいてよ。

お父さんのような生き方はできないんだ。

今だつてボクは充分に苦しいのに、これから、長い長い苦しみのトンネルをぐぐらないと、楽しいことはやってこないんでしょう？

まだ、始まりの始まりの始まりなんだよね。

ボクにはできやうにないよ。

お父さんみたいに立派な人間にはなれないよ。

医者、医者、医者、医者つて、息が詰まつやうだよ。

お父さんにもお母さんにも流星群を見に行きたいって話をしないまま、その日になつた。

カズヤには、一曰、「行くから」と返事をしてから、一昨日断つた。

本当は行きたかったんだ。タイミングを見て、お父さんかお母さんに話そうと思っていた。

だけど、結局、ムリだつてわかつた。

カズヤには「ばあちゃんが入院したから行けなくなつた」とウソをついた。

「めん、ばあちゃん。

その日、めずらしく早くお父さんが帰つてきた。

お母さんは、お父さんが帰つてきて、無表情のままだつた。

お父さんが早く帰つてくると、ボクは余計に落ち着かない。

何だか作り物の家族みたいな気がしてくる。

家の中の空気が鉛のよつに沈殿してきた。ボクは耐え切れなくなつて、お父さんに言つた。

「カズヤんちまで、行つてくる。一緒に勉強する約束してたから」ボクはウイングブレーカを羽織ると、自転車をこいで、家から20分くらいのところにある高台を田指した。

外の空気は氷のように冷たかったけれど、ツンと澄んでいた。自転車を走らせるうちに、少しづつ身体が温まつていつた。

途中の林道は、不法投棄をする人がいて、そんな車が2台ほど、ボクの横を通り過ぎた。

ちょっと怖い場所だ。ボクは全速力で自転車を漕いだ。

息が切れて、これ以上漕げないとthoughtた頃、視界が開けて高台に

出た。

空には沢山の星が見えた。

カズヤは今頃、彼のお父さんと一緒に、星を見るには最高の山でいることだつた。

望遠鏡がないのは残念だけど、それでも、明かりの少ないところに来ると、これだけの星が見えるんだ。ボクは、自転車を置いて空を見上げた。

立ち漕ぎで出た汗に、風が冷たく当たつた。鼻水が出やつた。南の空を見た。

さそり座は、隣町の山の向こう側だ。アンタレスは見えない。三日月がうつすら雲をかぶつていた。

小学2年の頃、じいちゃんが初めてボクに月を見させてくれた時、庭で秋の虫が大合唱をしていた。じいちゃんは、真剣になつて庭に望遠鏡を構えて、ばあちゃんは、縁側からボクらを見ていた。

あの頃、ボクは、自分の将来のことなんて、あんまり考えていたかった。

ほんやりと、「医者になるのかな」つてくらいで。

じいちゃんは、その時、ばあちゃんと「駆け落ち」をした話をしてくれた。

じいちゃんのお父さんとお母さんが一人の結婚に反対していたから、「駆け落ち」をしたと言つ。昔は親の言つことは絶対だつたら、親に逆らうことは考えられなかつたらしい。

その時のボクには、何だかよくわからなかつたけれど、今は「じいちゃんが、すごい」としたんだ」つてことぐらいは分かるよつになつた。

「翔太。自分の本当に大事な物は、戦つてでも手に入れなくちゃいけんぞ。」

じいちゃんが生きていたら、今のボクに何と言つただろ？

ボクはまた空を見上げた。

悲しいわけじゃないのに、後から後から、涙が溢れて止まらなかつた。

顔をこすつて、空を見上げたその時、一つの星が流れた。

「あつ」

思わず声が出た。

すると、ボクが驚いたので、じいちゃんがいたずらをしたんだろうか、

一つ、二つ、立て続けに星が流れた。

ジイちゃん。

ボクヲタスケテ。

ボクは心の中で叫んだ。

(後書き)

今回は、思い切って中学生を主人公にしてみました。翔太なりのプレッシャーを感じていただけたらいいかな、と思います。この後のストーリーは、皆様の想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7072c/>

ドクターズファミリー ケース3

2010年10月8日15時47分発行